

研究論文

黒川亀玉伝の検討

《キーワード》南蘋派 狩野休真 岡本善悦 成嶋錦江 関鳳岡

成澤勝嗣

はじめに

黒川亀玉（一七三二〜五六）という画家は、江戸の地で初めて沈南蘋スタイルの絵を描いてみせた異才であった。名は安定、字は子保。しかしわずか二十五歳で早逝し、白山の心光寺には今もぼつねんと墓碑を残す。碑銘に「宝暦六年歳在丙子六月辛酉、商山處士亀玉子卒」とあるから、それは晩夏の六月二十五日のことであった。のち大田南畝が『武江披砂』の中で、

亀玉子ハ東都ニテ唐画ヲハジメテ画シ人ナリト云。ソレヨリ諸葛監、宋紫石ナド云唐画オコレリト云。

と記したように、宋紫石らによる江戸地域の南蘋派画風の流行は彼の死後にやってきた。その意味でも先駆者としての彼の存在は突出している。また、亀玉とは同年齢である藤原貞幹（一七三二〜

九七）の『好古日録』九十二の「汎画」の項（汎キヨウはつかみ抱えるの意）に

近年汎画間々アリ、俗ニ指画ト云、亀玉コレガ祖ヲナス

とあり、実際に指頭画（筆を使わず、指や爪で描く）や杯画（盃で描く？）も残しているから、宝暦画壇のニューウエーブとして将来を嘱望されていたものとおぼしい。このまま順調に画技を伸ばしていたら、江戸画壇における南蘋派の勢力分布もずいぶんと変わったものになっていたにちがいない。亀玉のことは、かつて一度手元に集まった資料を紹介したことがあるが、その図録も今や入手困難なものとなった¹。本稿はそれ以降、今日までに知りえたわずかな資料を新たに提示するとともに、前稿で紹介済みの記録類をもあわせて収録しておくものである。

亀玉と狩野派

まず、前稿では長文ゆえ省略した墓碑銘によって亀玉の短い生涯をたどってみる。撰者は友人の滕士魏という人物。全文は蜀山人大田南畝の『武江披砂』附録、および結城素明『東京美術家墓所考』に収録される。実際の墓碑銘と比べてみると、蜀山人は僅かながら誤写があるものの全文を備え、素明は降って昭和六年の出版ゆえ墓石の欠損部が赤字となる。また、朝岡興禎編『古画備考』にも『武江披砂』からとして全文が収録されているが、これも多少の文字の差異が認められる。

亀玉は享保十七年十月二十八日に江戸白山で生まれた。白山という地名は、明和四年（一七六七）刊『東藻会彙地名箋』によれば、漢詩文において商丘、商山、商阜などと表記されることがあり、墓碑にも刻された「商山処士」の号は、すなわち亀玉の本貫地を表明するものであった。亀玉の先祖は源氏に発し、八代目の小里彦十が、三河で家康の祖父にあたる松平清康（一五一一～三五）に仕えた。その子源八は甲府黒川村へ流寓し、土地の名を姓とした。のち子孫は紀州徳川家に仕えて亀玉に至ったという。亀玉の祖父・源衛門（名前は碑銘のまま）が江戸へ出て、父周玉の時代から白山に住んだ。亀玉は周玉の二番目の子であり、母は稲垣家の女であった。あるとき、ちょうど亀玉の誕生日に異僧が訪れ、藍色に輝く徑二寸ほどの宝玉をくれた。父周玉はこれを亀の玉であるとして喜び、のち息子の画号となった。

五歳のとき、近所の白山権現で鎮西八郎為朝が伊豆大島で奮闘す

る図を見て、帰宅後それを摸写してみせた。それより絵に没頭し、まず六歳にして狩野休真（生没年不明）から草画を学んだ。狩野休真とは聞きなれない画家で、伝記もよくわからない。『古画備考』は「本姓羽賀氏、始玉燕門人」と記すのみ。どうやら狩野休伯長信を祖とする表絵師・下谷御徒町狩野の四代目・玉燕季信（一六八三～一七四三）の流れに連なる画家だったようで、町狩野の本所緑町狩野の休真隆信がこれに当たるか。²⁾

近年、この休真への入門を示す亀玉作品が発見された（図1・2）。落款に「狩野休真門弟黒川亀玉十歳筆」と記す「渡唐天神図」である。瓢箪形と方郭壺印の計二顆を捺しているが、ともに印付きが悪く判読できない。さすがに数えの十歳ではまだ手元がおぼつかなく、技術的には未熟というほかない。神に近いとされる子どもの作品であるところに、むしろかけがえのない価値があるのだろう。学問の神様を手習いに用いるのは狩野派の少年指導の定番であつたらしく、狩野探幽にも十二歳の落款をもつ墨画天神が残されている。³⁾ ほぼ同じ構図であるところが興味深いが、梅枝は逆向きで光背を負う。墓碑銘ではちょうどこの八、九歳の頃から名声は日毎に上がり、王侯貴人の逢迎すること雲の如くであつた、とする。

ついで、亀玉は十二歳にして岡本善悦（生没年不明）から画鷹を学んだという。善悦もまた遺品の稀な作家で、赤坂氷川神社に所蔵される「獅子図屏風」「神馬図屏風」が知られる程度であろう。⁴⁾ 紀州藩絵師・並川甫雲の弟子で、吉宗が紀州から江戸へ召し連れ、奥坊主御絵番として勤めた。氷川神社の遺品も吉宗が奉納したものである。吉宗が没した後、その肖像画制作にも関わつたらしく、宝曆

图1 黒川亀玉筆 渡唐天神図 寛保元年（1741） 73.8 × 24.2cm

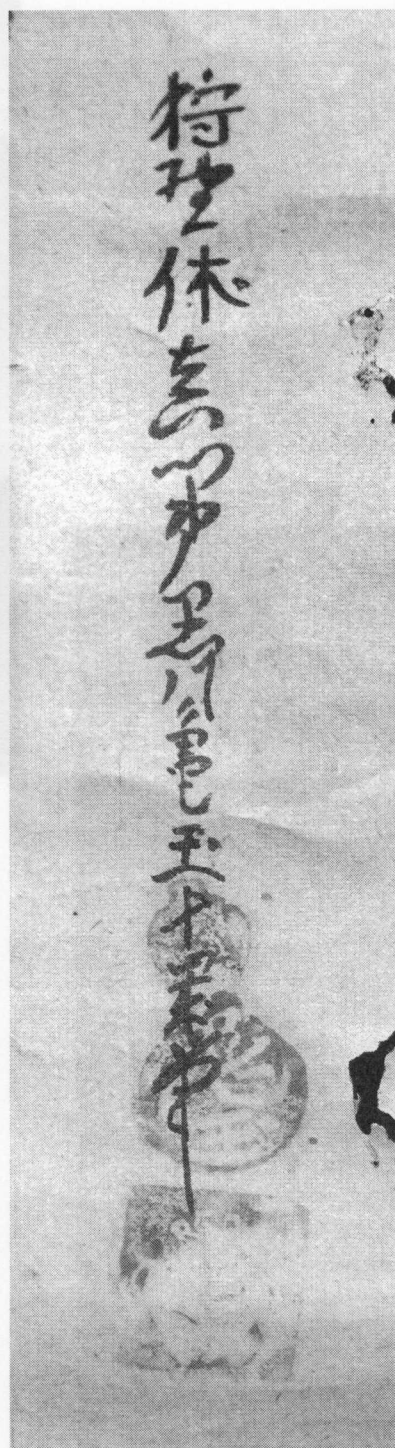


图2 同 落款



图3 岡本善悦（狩野豊久）筆 鷹図 成嶋錦江題 96.4 × 27.7cm

图3 同 部分 (1741) 羊元册页 32.7cm x 1.28m



图4 同 落款

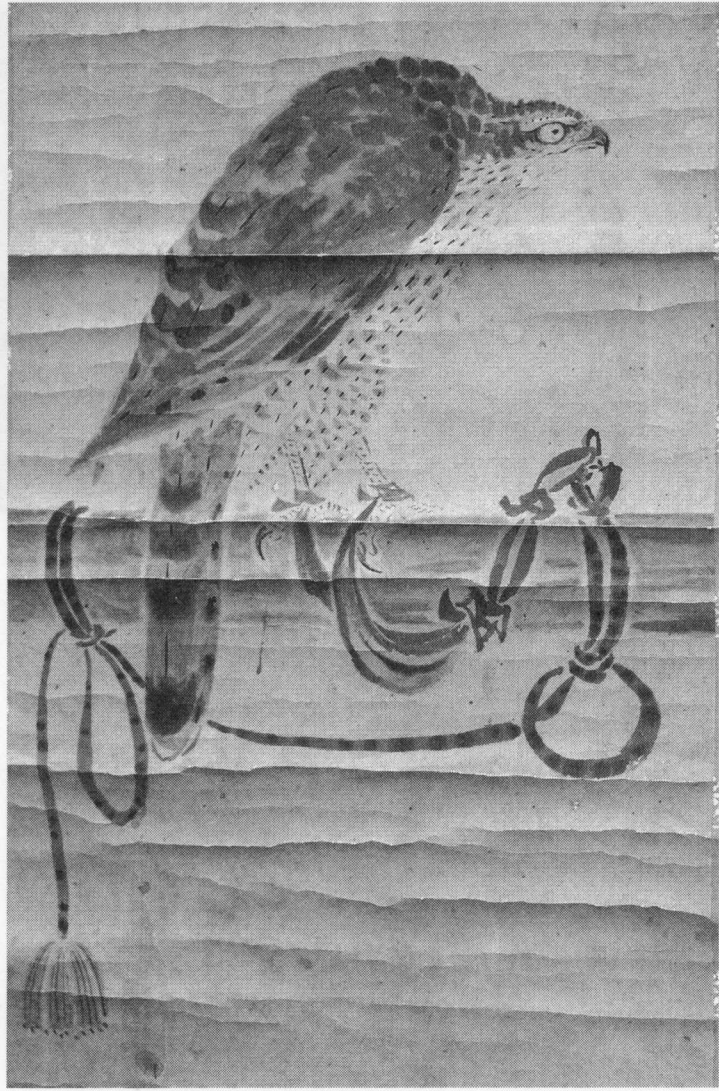


图5 同 部分 (1741) 羊元册页 32.7cm x 1.28m

二年六月三日に吉宗像揮毫の件で金二枚を賜ったことが『徳川実紀』に見えている。亀玉との師弟関係は、ともに紀州藩との関係から来ているものではなからうか。善悦は狩野豊久とも称した。彼が鷹を得意としていたらしいことは、吉宗の鷹狩好きとおそらく無関係ではあるまい。『古画備考』に、善悦没後の明和五年（一七六二）に狩野栄川典信によって作られた「善悦翁之像」が縮写されているが、そこでも彼は鷹図の掛け幅を揮毫する姿で描かれている。

ようやく近年、岡本善悦の「鷹図」を見る機会があったので併せてここで紹介しておきたい（図3・4・5）。水墨の行体による架鷹図で、江戸狩野スタイルによるぼんやりした画風の作品である。「豊久寫」の款記に「豊久之印」と読めそうな白文方印を捺してあるが、読み方は判然としない。上辺に記された五言絶句は「芙蓉道人題」として「鳳卿源氏」「字子陽」の二印があり、荻生徂徠門下の幕府儒官であった成嶋錦江（一六八九〜一七六〇）による。錦江は善悦と同じく、吉宗の奥坊主であった。こうして最初は狩野派を学んだ亀玉であったが、のちにその画風を離れ、中国趣味の強い様式を確立する方向へと向かっていく。

亀玉の文雅

その幕府儒官・成嶋錦江と、黒川周玉・亀玉父子が同席した華宴の様子を記録した版本がある。書名を『東都嘉慶花宴集』という。彼らは宝暦二年（一七五二）三月、千住にあった本草学者・田村藍水の雲和亭で、心越禪師が中国から帶來したという李すいもの花を賞でな

から琴碁書画の風流に興じたのである。その様子を描いた挿絵は亀玉が担当した。李の巨樹を囲んで父周玉が碁を打ち、隣では亀玉が絵筆を振るう姿が描き出されている。筆者は本書のことを岸邊成雄氏の『江戸時代の琴士物語』から知るのみで未だ全貌に接していないので、ここでは概略紹介のみにとどめる。⁵⁾

亀玉は画のみならず、書を関子肅に、碁を安仙角から学んだことを墓碑銘は記す。⁶⁾ 関子肅（一六九七〜一七六六）、号は鳳岡とい通称は源内。細井廣澤門下で唐様の書家である。のち土浦藩に召し抱えられた。安仙角は囲碁棋士の五世安井春哲仙角（一七一〜一八九）であろう。御城碁をもって幕府に出仕した。黒川家は亀玉の絵のみで家族十余人が生活していたというが、以上のような交友関係や、諸侯からの招きが多かったと墓碑銘が記すことから考えると、どうも単なる町人ではなかったように疑われる。亀玉の代にも吉宗、あるいは紀州徳川家との関係が続いていたのかもしれない。ならば新渡の沈南蘋画風をいち早く採り入れることができた事情も納得しやすい。

その一例といえるだろうか。亀玉は陸奥国泉藩主の大名・本多忠如（一七一四〜七三、生年は『寛政重修諸家譜』でなく湯島の麟祥院に現存する墓碑によった）との間に親しい交遊があった。号は壺山。太宰春台と高野蘭亭に儒学を学び、漢詩人として知られる。この文人大名が亀玉の才能を愛していたことは、亀玉の墓碑建立に尽力したという碑銘からうかがえるし、その詩集で宝暦九年（一七五九）諏訪藩主・諏訪忠林の序をもつ『壺山集』には、四か所に亀玉の名前があがる。⁷⁾ 川子保は黒川子保、すなわち亀玉のこと。

松蘿館は亀玉の居館である。以下にその四詩を掲載順に引用する。

携滕子行、重過川子保宅

稍同摩詰墅 不問辟疆莊 衆鳥鳴幽澗 微風入嫩篁
主人成畫癖 賓客搜詩腸 琴酒相携處 重開翰墨場

ここに登場する滕子行は伊勢松阪出身の伊藤華岡（一七〇九—七六）。黄檗僧終南浄寿の兄で、関鳳岡門下の唐様の書家。壺山の墓碑銘はこの人が書いた。ちなみに亀玉も鳳岡に書を学んでいるから、華岡とは同門となる。詩は唐代の文人・王維（摩詰）の別荘であった輞川莊や、晋代の書家・王献之が遊んだことで知られる顧辟疆の名園を引き合いに出し、溪流に鳴く鳥声と、そよ風にさざめく若竹の藪を賞美する。そこで主人（亀玉）は絵を描き、客（壺山や華岡）は詩を作る。さらに琴と酒が加わって、文雅の集いがくりひろげられるのである。

過飲滕子行新居、時宗延年、川子保、僧大海在座、各作畫因

賦 新築書齋接市樓 揮毫貰酒對清秋 攀蕉寫字唐懷素 種竹移居晋

子猷

結構何關來燕雀 棲遲偏愛似林丘 興闌恰勝開厨畫 坐客丹青薄
虎頭

参加者のうち宗延年は未詳。僧大海浄涛はやはり伊勢の人で黄檗

派の画僧・鼓嶽山人のことである。鼓嶽山人こと大海浄涛（生没年不明）は、画伝書の類によれば長崎で熊斐に学んだといひ、明和六年版『古今諸家人物志』は熊斐門下の黄檗僧・鶴亭の弟子と記す。浄涛という法諱から、彼も鶴亭と同じく黄檗僧であったと思われる。画風も鶴亭に近い。伊藤華岡の新宅で亀玉と出会い、ともに遊んでいるから、亀玉が没した宝暦六年以前の江戸滞在が明らかで、鶴亭も同じ頃江戸にいたことは数点の作品によってわかる。

遊子保松蘿館

溪流引我入林園 醉弄芳菲倒緑尊 遮莫花深迷出處 不然
誰識武陵源

亀玉邸の溪流をたどって庭に入り、花の香りと酒に酔う。花の深みに迷い込むもよし。武陵の桃源郷（中国の伝説の仙境）にたどりつけるかもしれない（大意）。

悼子保

丹青神化夙稱奇 豈獨前身是畫師 野草空餘彩毫色 商山秋氣不
堪悲

亀玉の棄世は晩夏のことであったから、秋を詠うこの詩は、心光寺における墓碑建立に際してのものであろうか。大意は「亀玉の死を悼む。彼の絵は神品にして奇であった。きつと前世は単なる画家ではなかったのだろう。今眼前に見る野草は彼の絵のままに色鮮

やかだというのに、白山の秋気は悲しみに満ちている」。

当時の諸大名の中に、漢詩を趣味とする流行のあったことは、湯浅常山の『文会雜記』に、服部南郭の言として「今ノ諸侯方ノ詩ヲ作ラル、ハ、貧窮ユヘ外ニ大ナル奢侈ナラデ、学問ヘ奔リタマフ」と皮肉られてはいるものの、こうした下地が江戸の武家社会に準備されていればこそ、南蘋派の愛好や、大名自身が南蘋派の画家になつてしまふという現象をまきおこしたものと考えられる。当時「唐画」と呼ばれた新画風は、まさしく中国画のニューウェーブとして、漢詩文愛好者たちに歓迎されたのである。

さらにもうひとつ、亀玉を取り巻いていた文雅の環境を知るために『猿橋碑銘』という版本がある。

古来、奇観として名高い甲斐国の猿橋の傍らに、甲府の石川筠齋（伝不明）が宝暦五年（一七五五）に碑を建立した。碑文は先述した吉宗の奥坊主・成嶋錦江が撰し、篆額を関鳳岡、書を佐久間東川が揮毫した。本書はその記念詩文集であり、出版人は碑の篆額を書いた関鳳岡。これも先述のように亀玉の書の先生である。冒頭の猿橋図は亀玉が描くが、出版はその死より遅れて宝暦十一年となった。続いて碑文と建立由来を載せたあと、高野蘭亭の詩（深見玄融書）、石島筑波の「行経猿橋」（三井親和書）、宮瀬龍門の「題猿橋碑帖後」（伊藤華岡書）、大内熊耳の「書猿橋図後」（平林東谷書）、松崎観海の「猿橋碑帖跋」（松山天姥書）が並んでいる。

煩を避けて、今いちいち彼らの略伝を記すことはしないが、いず

れも荻生徂徠につながる漢詩文の名手であり、書家も唐様の能筆がそろっている。さらには、書物全体を墨摺拓本ふうの法帖スタイルに仕立て、濃厚な中国趣味を示している点も注目される。ただ、別にここでも、亀玉が彼らのすべてと交遊があったといたい訳ではない。こうした文人サークルの中で彼の「唐画」が支持されていた、ということイメージしていただければと思う。

亀玉自身、病床にあつて「恨むらくは未だ赤羽夫子にまみえざることを」悔やんだと、墓碑は伝える。赤羽夫子、すなわち服部南郭（一六八三〜一七五九）はいうまでもなく古文辞派の大詩人であり、芝の赤羽橋近くに居を構えていたところから、この尊称がある。荻生徂徠の高弟で、江戸文壇のスーパースターであつた。亀玉は現世の名声は一時のことであると考え、むしろ徂徠に謁することでもわが名の不朽を望んだらしい。亀玉の墓碑銘を撰した友人の滕士魏なる人物についても伝未詳ながら、宝暦六年（一七五六）刊『むろのやしま』という石塚倉子の和歌集に、南郭とともに跋文を書いており、そこで「わが南郭のおきな」と呼んでいることからして、どうやら南郭門下であつた気配がある。同書の挿絵は亀玉と、雪舟十三代画裔を名乗る桜井三香子が分担した。亀玉のサインは「商山處士亀玉川安定」、印は「名安定号亀玉」である。

亀玉没後、未来を断ち切られた若者に寄せられた哀惜は、安永六年（一七七七）に刊行された古文辞派の漢詩人・千葉芸園（一七二七〜九二）の詩集が収録する以下の記述からも推察される。亀玉が愛用していた自作の画机についての一文である。

漆几銘并小引

黒川安定字子保號亀玉、嘗製几案、惟画是耽、以宝曆六年夭没、爾後伝其几於飯島汝文、汝文亦好画頗賦詩、可謂奇遇也、汝文就余請銘、余頷、略叙其所由、并作之銘、銘曰、

唯吾与爾 閑適日親 今隠几者 非在昔人

〔芸閣先生文集〕卷六

黒川安定、字は子保、号は亀玉、嘗て几案を製し、惟画是耽る、宝曆六年をもつて夭没す、爾後其几を飯島汝文に伝ふ、汝文も亦画を好み頗る詩を賦す、謂ふべし奇遇なりと、汝文余に就て銘を請ふ、余頷す、其の所由を略叙して并てこれが銘を作る、銘に曰、
唯だ吾と爾 閑適日に親しむ 今の几に隠（よ）る者は 昔の人にあらず

別に直接の関係があつたとかいうつもりはない（飯島汝文は伝未詳）。亀玉の画を愛し、育んだのは、こうした漢詩文を結縁とする江戸の文人社会であり、棄世後もなお、彼のことを偲ぶ人たちがいたことを記憶しておきたい。

絵入り俳書に見る亀玉

最後に、やはり近年目に付いた絵入り俳書に掲載された亀玉作品を二種紹介しておく。ひとつは俳人万千百太が編んだ宝曆五年

（二七五五）刊『俳諧絵風流』。これは、彼が蒐集して楽しんでいた名家の画に自句を添えて版行したものである。

画は菱川宗理の「宝船図」、建部凌岱の「梅図」、光琳の孫と記す小西以十の「杜若図」、立林何昂の「朝顔図」などがおもしろく、亀玉作品はおそらく墨画と思われる「菊図」が収録されている（図6）。款記は「亀玉安定寫」、捺印は「安定之印」「字日子保」である。見開きで記された百太の句は「山路の菊の露のまにかて経にけむ時代詩絵を」と題して「山家には よい道具なり きくの花」とある。本書の存在を筆者は『関東俳諧叢書』の影印本で知るばかりだが、同書の解題によれば、万千百太は江戸新材木町の家主・加賀屋長兵衛であるという。¹⁰⁾

いまひとつは、英一蟬（一蝶門人、大坂屋武兵衛）が宝曆七年（二七五七）に刊行した『名拳集』である。¹¹⁾ 出版は亀玉が没した翌年のこととなる。当時江戸で流行した様々な人物、芸能、名店、職業などジャンルを問わず集めたうえで、古句を付会したもの。取り上げられるのは、たとえば卜筮平澤先生（占い師・平澤左内）、団十郎せんべい、古法眼馬の絵（浅草寺名物・狩野元信の絵馬）、市川海老蔵、新吉原松葉屋内瀬川（花魁）、反魂丹松井屋源左衛門、竹田近江大掾（からくり人形）、浅草志道軒（講釈師）、両国幾世餅、烏石先生（唐様の書家・松下烏石）など、雑多なところが楽しませてくれる。

これらに混じって「唐絵亀玉」が登場する（図7）。描かれるのは墨蘭。下隅に「山高水長」の印があるが亀玉の使用印かどうか不明。亀玉没後ゆえ、本図は編者一蟬の摸写である可能性も考えてお



図6 『俳諧絵風流』（『関東俳諧叢書』第18巻より）



図7 『名挙集』（『関東俳諧叢書』第19巻より）

かねばならないだろう。付会される句は貞佐なる人物の「唐絵にも
仮名にしたる、柳かな」。左脇に「寛玉主人」の款と「思古人」
印があるものの正体不明。書家か。この資料も筆者はやはり『関東
俳諧叢書』の影印本で知るばかりだが、画人として収録されるのが
亀玉ひとりきりであるところを見ると、彼の「唐絵」が当時江戸市
中で得ていた評判のほどをうかがわせるに足る。

註

- (1) 拙稿「江戸の文人社会と「南蘋派」趣味」、『江戸の異国趣味―南蘋風大流行』
展図録、千葉市美術館、二〇〇一年一〇月
- (2) 筑波大学の「日本美術シソーラスデータベース絵画編」による。
- (3) 松原茂「探幽十二歳筆渡唐天神図―画壇デビューへのシナリオ」、『水莖』第
七号、古筆学研究所、一九八九年九月
- (4) 『港区文化財のしおり』一九八五年度版、港区教育委員会社会教育課文化財
係編、および『將軍吉宗とその時代展』図録、サントリ―美術館、一九九五
年八月
- (5) 岸邊成雄『江戸時代の琴土物語』、有隣堂印刷株式会社、二〇〇〇年九月
- (6) 『武江披砂』と『古画備考』は「関子甫」と記すがこれは誤写。
- (7) 国立国会図書館鶯軒文庫所蔵本によった。
- (8) 神戸市立博物館所蔵本によった。
- (9) 佐野正巳解題『詩集日本漢詩』第一五巻、汲古書院、一九八九年十二月、に
よった。
- (10) 加藤定彦、外村展子編『関東俳諧叢書』第一八巻「絵俳書編」②、青裳堂書
店、一九九九年二月
- (11) 加藤定彦、外村展子編『関東俳諧叢書』第一九巻「絵俳書編」③、青裳堂書
店、一九九九年六月

成澤勝嗣（なるさわ・かつし）

一九八五年 早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程修了

神戸市立博物館・同小磯記念美術館学芸員

二〇〇八年 早稲田大学文学学術院准教授